

歩行障害にどう対応するか

How to train people with gait disorder

歩行障害はリハビリテーション医療において主たる治療対象となる障害であり、対象患者の数も圧倒的に多いと思います。今回は、歩行障害の評価や治療方法・手技を解説していただきたいと考え、特集を企画しました。歩行障害を来す原因疾患はさまざまですが、脳損傷による片麻痺を中心として、できる限りエビデンスに基づいた治療方法をご提示いただきたいと無理なお願いをしました。明確なエビデンスが得られていない分野については、実際に臨床場面で行われている具体的な方法や症例提示をしていただいたので、明日からすぐに役立つ内容も多いと思います。じっくりお読みください。

歩行の評価 長谷公隆氏 309

リハビリテーション医療における歩行分析の役割は、目の前の患者に必要な治療法は何であるかを導き出すことである。歩行の評価について、機器を用いた歩行分析以外に、特殊な機器を用いずに測定可能でグローバルに利用されている観察による評価などを解説していただいた。歩行の自立度評価、実用性評価、歩行パターンの評価など多くの評価法が紹介されている。あまり知られていない評価法もあるかもしれないが、気になったものはご自分でさらに調べていただきたい。治療効果を明らかにするためにも客観的なデータを残しておくことが重要と強調されている。

歩行耐久性の向上 大隈秀信氏ら 317

病院の訓練室や廊下が歩けるようになって、社会生活を送るためには耐久性の向上が欠かせない。歩行耐久性向上に関する回復期や生活期の訓練の文献的考察とともに、片麻痺患者の入院生活における離床拡大、活動量拡大のための病棟の取り組みが紹介されている。退院後も毎日を活動的に生活することによって、全身持久力が改善する可能性がある。著者らが策定委員として関わった日本リハビリテーション医学会編集の『障害者の体力評価ガイドライン—脳血管障害・脊髄損傷、金原出版、2013』も文献が少し古くなっているが、種々の評価や訓練法が示されており有用である。

歩行速度の向上 大畑光司氏 325

歩行機能が重要であることに異論はないと思われるが、その場合歩行速度よりも安定して歩行できることがより重要視される。それはもっともなことではあるが、著者は、単に介助なしでの自立歩行の達成を目標にするのではなく、日常生活の状況に耐えうる歩行能力の再獲得を目指すべきであり、その指標として歩行速度は最適な視点となると述べている。さらに、歩行自立を目指す訓練と歩行速度の向上を目指す訓練の内容は異なるとして、具体的には下肢装具やトレッドミル、ロボットを使用した訓練についても紹介している。

屋外実用的歩行の獲得 藤井 智氏 331

歩行の安定性と耐久性を獲得し、歩行速度もそれなりに速くなって一定の屋外歩行能力が獲得できた患者でも、エスカレーターの利用や公共交通機関の利用などがすぐに可能となるとは限らない。積極的な社会活動のためには、これらを単独で利用できるようになることが必要である。著者らの経験から、脳卒中片麻痺を中心とした患者に対するトレーニングや留意点について解説いただいた。実際の治療場面では時間の制約などがあるかもしれないが、可能な限り実践的な訓練を行うことが重要である。

犬と一緒に楽しく歩く―歩行障害と介助犬の利用 高柳友子氏 339

介助犬の利用者としては脊髄損傷者が多かったが、最近は脳卒中や神経筋疾患などによる歩行障害のある使用者が増加しているという。介助犬の有効性としては、介助犬ならではの効果と犬としての共通的な効果があるが、これらは相乗的な効果をもたらしていると考えられる。実際に利用に至った3症例の提示とともに、介助犬とは何か、介助犬に対する歩行補助のための訓練内容なども紹介されているので参考にしていきたい。犬は散歩・外出をしなければいけない生き物であるため、歩行障害のある人に定期的な活動をしてもらうという点でも大きな役割があると考ええる。

お知らせ	「看護経済・政策研究学会」第40回研究会国際セミナー.....	316
	第28回よこはまスポーツ整形外科フォーラム.....	337